

# オスマン時代における アヤソフィアのモスク転用

山下 王世

## I はじめに

ビザンティン時代に帝都コンスタンティノーブル（現在のイスタンブール）に教会堂として創建されたアヤソフィアは、今日、キリスト教のみならずイスラームの信徒にとっても、歴史的あるいは宗教的な意味をもつ建築である。本稿ではそのアヤソフィアを対象とし、オスマン時代に東方正教会の教会堂からモスクへと変容していく過程を見直すことで、ビザンティン文化とオスマン文化があるひとつの建築を通して混淆した様子を考察する。

### 1 アヤソフィア

#### 1. 変遷

アヤソフィアは、537年にユスティニアヌス帝によって奉献された教会堂（図1）で、コンスタンティノーブル総主教座が置かれるなど、東方正教会の中心的存在であった。また建築史学の視点においては、バシリカに大ドームを架けるドームバシリカ様式により、異彩をはなつ特別な存在として位置づけられてきた（図2）。直径約32メートルの大ドームに覆われた大空間は、いつの時代においても、そこを訪れる多くの者達を圧倒してきた。創建から900年余りの歳月を経た15世紀半ば、コンスタンティ



図1 アヤソフィア外観写真（筆者撮影）

ノーブルを征服したオスマン朝スルタンメフメト2世もそのひとりだった。メフメト2世はアヤソフィアの意匠に感嘆し、これをモスクに改めることを命じた。そしてその後の500年近くの歳月をアヤソフィアは、イスラームの祈りとともに歩んだのである。

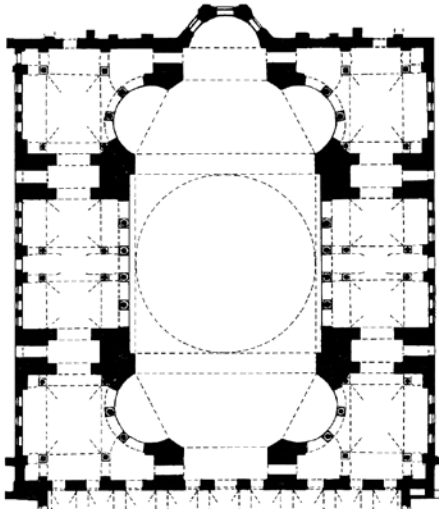


図2 アヤソフィア平面図（Mainstone 1988）

## 2. 二つの宗教のはざままで

20世紀に入り、トルコ共和国が成立し、脱イスラーム政策が推し進められるとアヤ

ソフィアは、モスクから博物館へと立場を変え、教会堂として使われた時代の様子とともに、モスクとして使われた時代の様子を、現代の人々に伝える装置としての役割を担うようになる。しかしながら脱イスラーム政策が緩和された20世紀半ば頃からは、博物館としての位置づけを疑問視し、再度のモスク化を求める声が聞かれるようになる。21世紀に入った現在、アヤソフィアは博物館というステイタスを保ち続けてはいるが、その処遇については慎重に議論されるべき内容が含まれている。アヤソフィアのモスク化をめぐる問題は、人々が常に記憶にとどめておけるような一定の間隔をもって繰り返し報道されている。また、トルコのメディアは、海外の先鋭的な動きに敏感に反応する傾向があり、例えば2005年には、アヤソフィアの教会堂化を呼びかけるスイスでのキャンペーンについていち早く国内に伝えている<sup>1)</sup>。ごく一部に見られるこうした極端な動きを逐一とりあげるトルコメディアの姿勢からは、この問題が現代トルコ社会にとって妥協や歩み寄りのしづらい性質のものであることが読み取れる。

しかし歴史を振り返ってみると、このような緊張した状態が常に存在してきたわけではない。そこで本稿では、オスマン時代のアヤソフィア、ならびに複数のスルタンのモスクを対象にして、両者それぞれにみられる造形上の変化の内容を明らかにすることで、その変化を許容した社会の様相を垣間見ることを試みる。そのため、第II章では、コンスタンティノープルを征服したメフメト2世の姿勢と、その征服の前と後で明確に変化するオスマン朝モスクの意匠を整理する。続く第III章では、コンスタンティノープル征服後のオスマン社会において、オスマン朝の重要建築であったスルタンのモスクにアヤソフィアの構造が試行されていった過程、ならびにアヤソフィアにおけるミナレットの増築、墓所の建設、人物像を含むモザイク画の扱いを考察することによって、オスマン社会におけるアヤソフィアの位置づけを明らかにし、最後のまとめにつなげたい。

## II コンスタンティノープル征服を境として

オスマン時代のモスク建築は、1453年のコンスタンティノープル征服から1500年頃までの約50年の間に、そのかたちを決定的に変えていく。その変化の時期と、外観や平面形式の特質から、宗教が異なるとはいえ、アヤソフィアとの出会いが一定の影響をもっていたことは明らかである。

### 1 コンスタンティノープル征服までのオスマン朝モスク

13世紀末からコンスタンティノープル征服までのオスマン朝モスクの事例の多くは、ブルサ、エディルネのような初期オスマン朝首都を中心に建設された。初期事例は大きく3つのグループに分類できる。第1グループは、礼拝以外の用途に使われた付属室を複数有することが特性で、平面図上ではT字を逆さまにしたかたちのモスクである(図3)。この平面形式は、スルタンのモスクをはじめ、初期において比較的収容力に余裕のある事例に用いられた。付属室は放浪する修道僧の宿泊施設として使われたと考えられている。第2グループは事例数こそ少ないが、ブルサのウルモスク、エディルネのエスキモスク等、街の中心に位置する存在感のあるモスクに用いられ、収容力の点では第1グループに同等、もしくはそれ以上のこともある。礼拝空間を同じ大きさの小ドームで覆うために、礼拝空間には多数の柱が立つことになる(図4)。トルコでは多柱式モスクという呼称の他にアラブ式モスクとよばれることもあ

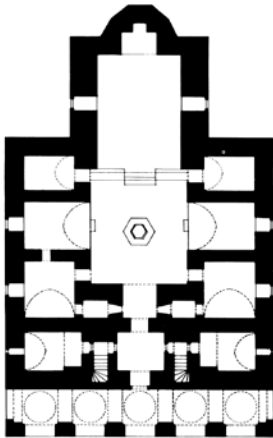


図3 逆T型のモスクの1例  
(Goodwin 1971)

る事例に用いられた。付属室は放浪する修道僧の宿泊施設として使われたと考えられている。第2グループは事例数こそ少ないが、ブルサのウルモスク、エディルネのエスキモスク等、街の中心に位置する存在感のあるモスクに用いられ、収容力の点では第1グループに同等、もしくはそれ以上のこともある。礼拝空間を同じ大きさの小ドームで覆うために、礼拝空間には多数の柱が立つことになる(図4)。トルコでは多柱式モスクという呼称の他にアラブ式モスクとよばれることもあ



図4 ブルサウルモスク（筆者撮影）

り、イスラームの預言者ムハンマドがアラビア半島のマディーナに建設した自身のモスクに端を発する多柱式を基盤とした上で、その天井には、陸屋根ではなく、オスマン建築の特性ともいえる複数の同大ドームが架けられたかたちと位置づけられている。第3グループは、ひとつのドームで覆われた正方形平面の礼拝空間をもつモスクで、これは初期だけでなく、時代を通して小規模事例（径10メートル前後）を中心に用いられた形式である。この形式の礼拝空間は、壁や柱に遮られることはなく一体的な空間で集団礼拝に適しており、小規模ながらも空間としての完成度は高く評価されている。

これらコンスタンティノープル征服前の初期オスマン朝モスクに共通する特質は、第1に、屋根を主として半球型のドーム、稀にヴォールトで覆うことである。そのスパンの規模は、後述する例外はあるものの概ね8-10メートル程度であった。第2に、ドームを半分にした半ドームという構造要素が一切使われなかったことも初期モスクの重要な特質であると

いえるだろう。

## 2 コンスタンティノープル征服後のモスクにもたらされた変化

### 1. メフメト2世

1453年、コンスタンティノープルを征服しその地をオスマン朝の首都に定めたメフメト2世は、街に入るとまずアヤソフィアを訪れた<sup>2)</sup>。歴史家トウルスン・ベグは、アヤソフィアに足を踏み入れたスルタン一行が、天のように大きなドーム、波模様の大大理石製の床、金モザイクの芸術的美しさに目が離せなくなっている様子を伝えるとともに、メフメト2世がアヤソフィアを自分のモスクにすることを命じたと述べている<sup>3)</sup>。また、メフメト2世のワクフ文書の中には、アヤソフィアについて「この上なく装飾された教会堂」と記されており、スルタン自身のアヤソフィアに対する印象をうかがい知ることができる<sup>4)</sup>。それまでのオスマン朝モスク、例えば初期オスマン時代の首都ブルサにあるイエシルモスクのように、その都市の傾斜の多い地形にあわせた穏当な規模のモスクに慣れ親しんできたオスマン朝スルタン一行にとって、アヤソフィアの厚みと深みのある大空間と、壁面やドームにはりめぐらされたモザイク装飾から受けた印象は、並々ならぬ刺激に満ちたものであっただろう。一行が大空間に圧倒され、モザイク画の美しさに目を奪われたことは想像に難くない。

そうはいってもアヤソフィアをモスクに転用するというメフメト2世の決断が、その壮大さや美しさに驚嘆したという理由だけで下されたとは言いがたい。なぜならスルタンは、征服直前にビザンティン帝国から去っていった非イスラーム教徒に生命と財産の保障を約束し、首都へ戻ることを奨励したり、既存の橋梁や道路等の都市施設の継続的利用なども行っており、そこには先行文化の遺産を再利用して帝国発展に役立てるという冷静な統治者としての姿勢がみてとれる。アヤソフィアをモスクに改めるという行為は、キリストの教えではなく、ムハンマドの教えに従って神を賛美

する装置への修正を意味している。これに加えてメフメト2世は、自らが新設したモスク、エスキファーターティフモスクにアヤソフィアの建築要素を積極的に取り入れてもいる。メフメト2世にとってビザンティン帝国とオスマン帝国、そしてアヤソフィアとエスキファーターティフモスクは、断絶するものではなく、つながりあって然るべきものだったのである。

## 2. コンスタンティノーブル征服後のモスク

そのメフメト2世の意思は、スルタン自身のモスク、エスキファーターティフモスク（1463-70）の意匠に明確に表れている。当時の歴史家は、エスキファーターティフモスクについて、アヤソフィアの意匠を基にした大モスクであり、そのモスクはアヤソフィアがもつ芸術的要素を全て含むばかりでなく、斬新な表現からなる最新の特徴を取り入れていると述べている<sup>5)</sup>。エスキファーターティフモスクは、コンスタンティノーブル征服前のスルタン達のモスクの多くとは規模を大きく変え、径26メートルという、その当時のオスマン朝モスクでは最大ドームを戴いた。この大規模化を可能にした構造要素がアヤソフィアを手本にして導入された半ドームであり、これによりエスキファーターティフモスクは、より広く、より高い礼拝空間を得た。

実は、メフメト2世の先代スルタンがエディルネに建設したウチュシェレフェリモスク（1437-47）は、半ドームを用いずに既に径24.10メートルのドームを冠しており、コンスタンティノーブル征服前の事例の中では例外的に大きかった。ウチュシェレフェリモスクの存在は、ドーム大規模化への志向が既にコンスタンティノーブル征服前から醸成されつつあったことを明示している。しかしながらウチュシェレフェリモスクとエスキファーターティフモスクを比べると、その礼拝空間には違いがある。エスキファーターティフモスクは、半ドームを導入することで、中央ドームの大規模化を実現したとともに、そのドームをより高い位置に据え、礼拝空間中央

部に向かって高さを増していく空間を得ることに成功している。それに対してウチュシェレフェリモスクでは、半ドームは用いられず、よって高さが獲得されることはなく、中央ドームは他の小ドームと同じレベルに設置され、均質な高さを保持した中世モスクに繋がる伝統的な特質を保持しているのである。エスキファアティフモスクにおける高くそびえるドームの出現は、オスマン建築史上、重要な変化であったといえる。

この後、メフメト2世に続く複数のスルタン達も、この変化を受け継ぎ、大ドーム建設に挑戦していく。バヤジト2世のバヤジトモスク（1501-06）は径18メートル、若くして没したスレイマン大帝の皇子のために建設されたシェフザーデモスク（1544-48）は径19メートル、スレイマン大帝自身のスレイマニエモスク（1550-56）は径26.60メートル、セリム2世のセリミエモスク（1567-74）は径31.50メートルというように、征服からオスマン帝国盛期までの約100年余りの間に建設されたスルタンのモスクの多くは、中央ドームを大規模化し、礼拝空間の最も高いところに据え、アヤソフィアとほぼ同径のドームをもつセリミエモスクに到達するまでその成長を続けた<sup>6)</sup>。それらのモスク群は、中央の径約18メートルから31.50メートルまでの大ドームを、その周りに設けられたいくつかの半ドーム、ならびにペンデンティヴと大アーチ、そして4本もしくは6本もしくは8本の重厚な大ピア（柱）で支えるものである。コンスタンティノープル征服までの初期オスマン朝モスクの礼拝空間は、概ね径8-10メートル程度のドームで覆われた空間単体か、それを隣り合わせに並べることによって構成された。そのため、より広い礼拝空間を構成しようとした場合、壁体や複数の柱で遮られることになったが、征服後のモスクでは、複数あるドームのうち中央部分のひとつだけを飛躍的に大規模化させ、より広い空間を獲得するという手法を採用するようになった。その挑戦は、大規模モスクの新様式を創り出し、オスマン帝国のモスク意匠全体の方向性を力強く牽引したのである。



### III 二つの宗教文化の交流

#### 1 オスマン朝のモスク建築

##### 1. 半ドームの効果

中央ドームに添えられる半ドームは、建築の構造力学上、重要な役割を担っている。ドームの荷重が頂部から下部へと向かうと、ドームは下部のところで外側へ広がろうとする、すなわち外側へ向かう力となる。この外側へ向かう力が、その反対方向である内側に向かう力によって抑えられることが、大ドーム構造の安定には不可欠である。中央大ドームに添えられる半ドームは、中央大ドームの下部で外側へ向かう力を、半ドーム自らの荷重で内側方向に押し戻す効果がある。このことから中央ドームの大規模化は、半ドームとセットで試行されたからこそ実現したと考えられる。アヤソフィアのドームには、西側と東側にそれぞれひとつ、計2つの半ドームがそえられている。半ドームが設けられなかった北面と南面では、重厚なバットレス<sup>7)</sup>が半ドームに代わって中央ドームを支えている。しかし実のところ、アヤソフィアのドーム構造は決して安定していたわけではなく、数度にわたる倒壊と修理を経て現在に至っている<sup>8)</sup>。557年の地震の翌年に大アーチ、半ドームとともにドームの約半分が倒壊し、10世紀ならびに14世紀にもドームの一部が崩落し、修理が行われたことが記録されている。半ドームが設けられなかった北面と南面の補強がバットレスだけでは不十分であったことが、崩落に至ったいくつかの理由のひとつと考えられている。

##### 2. 構造の試行

オスマン朝モスクにおける半ドームの試行は、コンスタンティノーブルを征服したメフメト2世自身のモスク、エスキ（旧）ファーティフモス

ク（図5）で始まった<sup>9)</sup>。それ以前のオスマン朝モスクには、ドームは頻繁に使われるものの、半ドームという要素が確認されないことは前述したとおりである。エスキファーフモスクの場合、半ドームは、中央大ドームのミフラブ<sup>10)</sup>側にひとつだけ設けられた。ひとつだけというアンバランスな構造が1767年の地

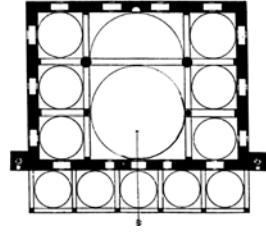


図5 エスキファーフモスク平面図（Ağaoğlu 1930）

震後の倒壊につながったと考えられている。半ドームを一面にのみ設けたこの屋根構造は、半ドームが建設されなかった3面において、半ドームに代わって構造の安定性を確保するバットレス等の構造要素を要するが、十分ではなかったと推測される。このことはドームを大規模化した時にどのような支えがどこに必要なのかということへの理解がまだ浅かったことを示している。地震後にスルタンムスタファ3世によって再建されたイエニ（新）ファーフモスクの屋根構造は、中央大ドームを4方向から4つの半ドームで支えるもので、構造的には極めて安定しており、現役モスクとして現在も利用され続けている。

ところで、中央大ドームを4つの半ドームで支える手法は、シェフザーデモスクにおいて1540年代に既に用いられている。シェフザーデモスクを設計したのは、主任宮廷建築家に着任して間もないスイナンであったが、この建築家は、構造的には極めて安定したこの構図を繰り返すことはしなかった。このことは、構造的な安定を確保したとしても、それだけでは建築家の追求する理想の空間を得られるとは限らないという意匠の問題の大きさを示している。

その後、スイナンが手がけた、スレイマニエモスク（図6）では、中央大ドームのミフラブ側（南東）と中庭側（北西）に各1つ、計2つの半ドームが設けられ、アヤソフィアと同じ屋根の形式がとられている。アヤソフィアでは半ドームが備え付けられていない北面と南面にはバットレ

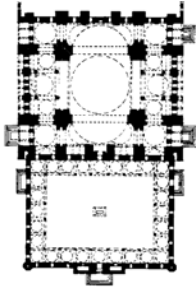


図6 スレイマニエモスク平面図 (Aslanapa 1989)



図7 スレイマニエモスク (筆者撮影)

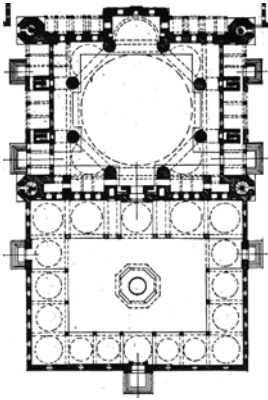


図8 セリミエモスク平面図 (Aslanapa 1989)

スが設けられたが、径 26.60 メートルのドームを冠するスレイマニエモスクでは、半ドームの無い南西面と北東面には、重厚な塔（内部空間では大ピアとなる）と階段状の壁体が配置され（図7）、中央大ドームの荷重を支えている。半ドーム、塔、ピア、壁体を巧みに組み合わせることで中央大ドームを支える構造は、その後、ドームを六角架構、または八角架構で支える際に応用されていく。

16世紀後半、セリミエモスク（1567-74、図8）の建設に取り組んだ時のスィナンは、主任宮廷建築家として約30年の経験を有し、円熟期を迎えていた。そこでこの建築家は、オスマン朝最大規模の中央ドームを八角架構で支持する方法を採用した。注目される点は、その建設事業に至るまでの間にスィナンが、中央ドームとそれを支持する半ドームの関係を、方形架構のミフリマフスルタンモスク（主ドーム+3つの半ドーム）、ならびに前述したシェフザーデモスク（主ドーム+4つの半ドーム）において、また六角架構のスィナンパシャモスク（1555-56）やカラアフメトパシャモスク（1558、図9）で試行し

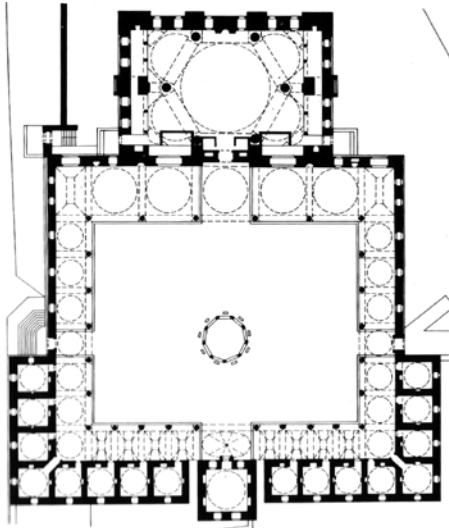


図9 カラアフメトパシャモスク平面図  
(Goodwin 1971)

ていたところである<sup>11)</sup>。オスマン建築で六角架構が初めて用いられたのは、コンスタンティノープル征服前の最大規模事例であるウチュシェレフェリモスク（1437-47）においてであった。六角架構は、半ドームを経験したことのない初期オスマン建築が、大ドームを支持するために編み出した独自の架構方法である。そのウチュシェレフェリモスクに用いられた、六角架

構の四隅を不規則な曲面天井で処理する手法を、スイナンはスイナンパシャモスクにおいては踏襲している。しかし次のカラアフメトパシャモスクにおいてはその四隅に半ドームを用いることで合理的な構造に導いた<sup>12)</sup>。このようにオスマン建築の伝統的な六角架構に、オスマン建築にとっては新しい要素である半ドームを組み合わせるという試行の過程は、八角架構のセリミエモスクの中央ドーム移行部に小さな半ドームを導入することにつながっていく。セリミエモスクの中央ドームは、四隅にある4つの半ドームと巧みに組み合わせられて、大空間を覆ったのである。大ドームと半ドームを組み合わせることによる相乗効果のヒントはアヤソフィアから導きだされたことは言うまでもないが、それに加えてオスマン朝モスクでは、独自の架構方式に半ドームを加えての試行が繰り返された。この試行錯誤から創造された空間は、アヤソフィアの三廊式ドームバシリカの空間構成とは異なり、モスク内部を隅々まで見渡せるようなより一体的な空間であった。

### 3. 継承された伝統

以上のように、スルタンのモスクの意匠にとって、アヤソフィアの構造は極めて重要な学びの源だった。建築家は、アヤソフィアの大空間と半ドームの関係を読み取り、それをモスクに試行、実践した。そして、オスマン建築独自の六角架構に新しく半ドームを組み合わせるなどの試行の末に、八角架構の四隅に半ドームを用いるセリミエモスクのような新しいモスクの形を創造した。アヤソフィアの構造様式と意匠をここまで熱心に研究、継承しようとしたオスマン帝国の建築家の姿勢は、キリスト教世界を含めて考えても類まれな部類にはいるのではないだろうか。アヤソフィアは先行文化の遺産でありムスリムのもではなかったが、オスマン社会において除外や置き去りの対象とされることはなく、むしろそれは継承すべき伝統として扱われた。オスマン帝国の人々はアヤソフィアの建築伝統を継承し、さらにそれを自らの文化と融合させ、新しいかたちをうみだすという創造にまで至らせたのである。

## 2 モスクとしてのアヤソフィア

教会堂をモスクに転用する作業の全てが、メフメト2世ひとりの手にゆだねられ完成されたわけではない。むしろメフメト2世期には、鐘塔から鐘が取り除かれ、ドームの頂きにあった十字架、内部のイコンや聖遺物などが取り除かれた後は、これがイスラームの礼拝堂であると人々に示す最低限のサインが取り付けられるにとどまったといえる。礼拝堂内部には、メッカの方向に合わせて、ミフラブとミンバル（金曜集団礼拝用の説教壇）が設置された。これらはイスラームの祈りの空間に必要な基本的な装置である。また、礼拝堂の外側においては、建物の裏手にイスラーム神学研究のための神学院が建設され、本体にはミナレットが増築された。ここでは、ミナレットの増築、墓所の建設、人物像を含むモザイク画に加

えられた改変を見直すことで、オスマン時代におけるアヤソフィアの位置づけについて考えてみたい。

### 1. ミナレットが表象するもの

オスマン時代には、王室の者だけが複数のミナレットを建てるのが許されていた。時代にもよるが、ミナレットの本数は、そのモスクの格をゆるやかに示唆することがあった。加えて、ミナレットはバルコニーから礼拝を呼びかけるという本来の目的のみならず、そこにモスクがあることを示す都市のサインとしての役割も担っていた。

アヤソフィアのミナレットの建設作業は、まずは西側立面の南端にある小塔の上に仮ミナレットを急ごしらえし、その次にミフラブ壁の両端にそれぞれ1本、合計2本のミナレットを建設する手順で行われたと考えられている。その最初の2本のミナレットは、メフメト2世によって建設された。そしてその後ムラト3世(1574-95)の治世にさらに2本が完成し、最終的には4本となって現在に至る<sup>13)</sup>。アヤソフィアの3本目と4本目のミナレットを完成させたのはムラト3世であったが、増築を発案したのはセリム2世であったことが近年の研究で明らかにされている<sup>14)</sup>。オスマン帝国下、アヤソフィアモスクの最初の大規模修理は、1572-4年、スルタンセリム2世によって手掛けられたが、1573年、セリム2世は建築家メフメドに新しいミナレットにふさわしい基礎の建設と、バットレスの修理を命じ、さらに同年6月には建築家スイナンを含む専門家とともにスルタン自らがアヤソフィアを視察し、モスクのまわりに35腕尺分(約17.50メートル)のスペースをあけること、神学院のまわりは3腕尺分(約1.5メートル)の通路を確保すること、隣接する倉庫を取り除くこと等とともに、ミナレットと頑丈なバットレスの建設を命じている<sup>15)</sup>。当時、アヤソフィアの周りにはもたれかかるように建物が建設されており、その時すでにアヤソフィアは1.5腕尺分(約75センチメー

トル)、傾いていたと伝えられている。セリム2世による修理・増築計画は、スルタンの崩御により未完となるが、その後、息子のムラト3世が継続し、ミナレット2本と後述する墓廟を完成させたのである。

モスク転用時に話を戻すと、メフメト2世がアヤソフィアに建設したミナレット数が2本であったということはすなわち、アヤソフィアがスルタンのモスクというステイタスを獲得したことを明らかに示している。メフメト2世の時代(1444-46, 1451-81)には、メフメト2世自身のエスキファーフティフモスクのミナレットが2本であるように、スルタンのモスクには2本のミナレットが通例であった。しかしやがてスレイマン大帝(1520-66)は自らのモスク、スレイマニエモスクに4本のミナレットを建設しており、その次のセリム2世(1566-74)もエディルネに設けた自らのモスク、セリミエモスクに4本のミナレットを建てた。以上のようにスルタンのモスクのミナレット数が増えていった背景を受けて、アヤソフィアのミナレットも増築されていったものと考えられる。オスマン朝スルタンは、異なる宗教の祈りの場であったという過去をもつためにアヤソフィアを格下のもの、他者のものと捉えることは決してなく、むしろもはや自らのものとして接していたといえるだろう。

## 2. 征服の象徴からスルタンの墓所へ

ビザンティン文化の美と技術力が凝縮された宝物アヤソフィアはしかし、征服後からしばらくの間はキリスト教に対するイスラームの勝利の象徴でもあった。征服後、ミフラーブ横には、イスラームの勝利を記念する品として、預言者の礼拝用絨毯4枚のうちの1枚がつりさげられ、さらにはコンスタンティノーブル征服を記念するメフメト2世の旗がミンバルの両側に取り付けられた<sup>16)</sup>。征服を象徴する品々は、コンスタンティノーブルを征服したメフメト2世の治世下のみならず、それ以後もモスク内部に蓄積されていく。ミフラーブ両端に置かれたブロンズ製燭台は、

スレイマン大帝が1526年にハンガリー帝国征服の戦勝記念品としてブダペストの教会堂から持ち帰ったものである。その燭台には、「信仰の火が永遠に灯されますように。イスラームの火が永遠となりますように」という1節が刻まれ、アヤソフィアに寄進された<sup>17)</sup>。このようにアヤソフィアは、オスマン帝国の複数のスルタン達が征服した地の戦利品をその内部に置いたことで、イスラームの栄光の記憶を蓄積していくことになった。

アヤソフィアがモスクに転用されて100年以上経過した16世紀後半以後になると、これとは異なる動きが出てくる。オスマン帝国のスルタン達は大小様々な規模であったが、アヤソフィアの修理を手がけるようになるが、同時に自らの墓廟をその敷地内に置いたのである。アヤソフィアを最初に大規模修理したのはスルタンセリム2世であったが、スルタン自身の崩御により、息子のムラト3世がそれを継続、完了した。その作業の中でムラト3世は、前述のミナレット2本とともに、セリム2世の墓廟を完成させた。

コンスタンティノープルをオスマン朝首都として以後、スルタン達はイスタンブールの高台に自らの名を冠するモスクを建設し、その敷地内に自分の墓廟を設けてきた。セリム2世はといえば、エディルネに帝国最大級を誇る自身のモスク、セリミエモスクを建設したのだが、そのモスクに自身の墓廟を置くのではなく、アヤソフィアの敷地内に設けた。それまでの流れを変えるこの決断は、アヤソフィアのイメージや役割、位置づけに重要な変化をもたらしたといえるだろう。すなわち、アヤソフィアには、イスラームの勝利の象徴という一面に、スルタンの埋葬場所という役割が加えられたのである。ここから、アヤソフィアが本来的な意味でイスラーム社会へ浸透していくさまを、垣間見ることができるのではないだろうか。

また、モスク建設の観点から見れば、オスマン朝スルタンが新設する数々のモスク群に埋もれてしまうことなく、ミナレットが増築され、さらにスルタンの墓所が設けられることで、アヤソフィアはそのステイタスを



維持するだけでなく、ますますオスマン王室と切り離せない建築物のひとつとなっていく。セリム2世の後代のスルタンたち、例えば1595年に崩御したムラト3世も、アヤソフィアの小規模修理を手掛けると同時に自らの廟をアヤソフィアに設置した。さらに1603年崩御のメフメド3世の廟は、その息子メフメド1世の命で1608年に同じくアヤソフィアの構内に建設されている。このメフメド1世による修理は、ドームの鉛の吹き替え、窓枠と碑文の刷新、タイル被覆の追加、スルタンの礼拝室、ミフラーブ、ミンバルのペイント装飾の修理等を含み、比較的大がかりなものだった。スルタンの埋葬はさらに続き、1639年、スルタンムスタファ1世はそれまで別の用途に使われていた場所を改装して埋葬され、1648年に崩御したスルタンイブラヒムも同所に埋葬された。こうして修理が重ねられるたびにスルタンの廟が増えていき、いっそう王室との関わりが深まったアヤソフィアは、イスラーム化を深化させ、オスマン帝国の歴史と切り離せない存在となっていった。

以上のような経緯から、オスマン帝国を自らの歴史と考えるトルコの人々にとってアヤソフィアは、16世紀から17世紀にかけて君臨したオスマン朝の複数のスルタンが永遠の眠りにについている場所、自らの歴史と記憶が蓄積した重要な場所となったのである。

### 3. 人物像を含むモザイク

イスラームではクルアーンにおいて偶像崇拝が禁じられていることから、イスラーム美術においては神像の描写はなされない。これとともにとりわけ宗教的な空間においては、人物像や動物の描写も忌避されてきた。イスラーム美術を方向づけてきたこうした宗教的な決まりごとを踏まえると、アヤソフィア内部における人物像を含むモザイクは、この教会堂がモスクへと転用されると同時に全て覆い隠されたと考えられがちである。オスマン時代に建設された宗教施設の装飾に人物像や動物像が用いられるこ

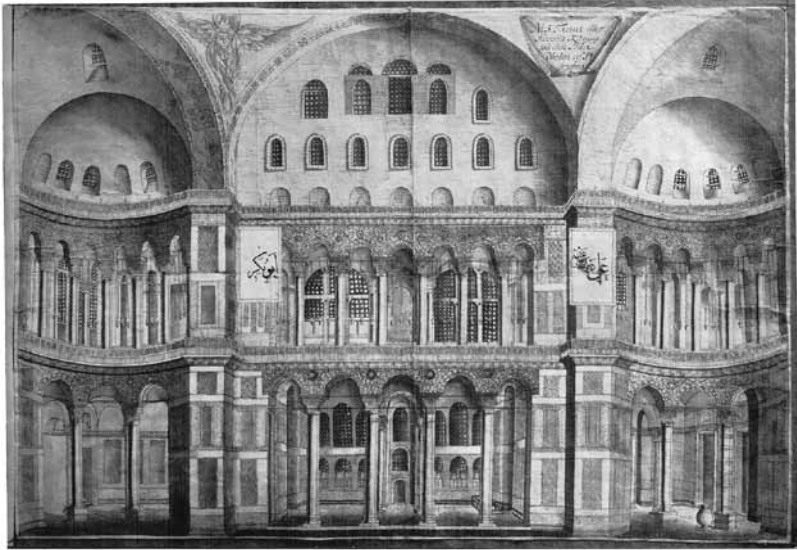


図10 ティンパナム詳細 ロース作 (Mango fig.56)

とがなかったことから、そう考えることが自然といえるだろう。しかし複数の旅行者が伝える記述や描画は、必ずしも全てがモスクへの転用と同時に覆い隠されたのではなかったことを明確に示している<sup>18)</sup>。アヤソフィアのイスラーム化は、この点でも時間をかけてわずかずつ進んでいったといえる。

礼拝空間の壁を覆う人物像を含むモザイクは、壁面の低い部分にあるものにはすぐにモルタルが塗られたが、礼拝する信徒の視界よりも上方にあるものは16世紀頃まで手つかずであったようである。1710年に制作されたスウェーデン人技師ローズによる描画は、ティンパナムのニッチに施された人物像モザイクが、オスマン時代セリム2世期の1573年、アヤソフィアの大規模修理が行われた際に覆い隠された可能性を示唆しているように見える(図10)。セリム2世による大修理では、ティンパナムにある2列の窓の両側に石を積み開口部を縮小することで構造補強が行われたが、それと同様の石積みが、その2列の窓列の下に並ぶ、人物像モザイ



図11 身廊 1672年グレロ作  
(Mango fig.2)

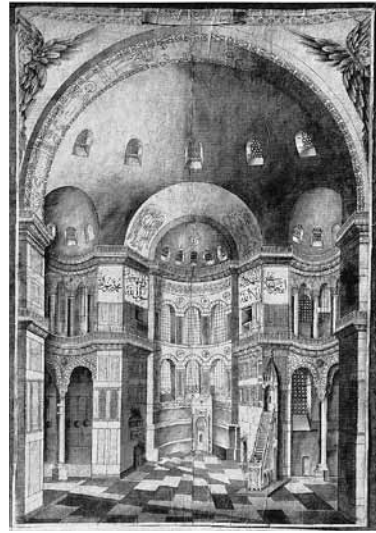


図12 身廊 1710年ロース作  
(Mango fig.90)

クが施されたニッチにも積まれている様子が描かれているからである。

アヤソフィアの中央ドーム内側頂部にあったと考えられているパントクラトールのモザイク画は、いつの時点かにコーラン章句のアラビア語カリグラフィー装飾に変えられるが、その変更がいつ施されたかに関しては諸説ある。1612年ならびに1621年に、ドームのコーラン章句カリグラフィーについての言及がなされている一方で、1652年まではパントクラトールの顔が確認できていたかもしれないことを伝える記述も残されており、実情は判然としない<sup>19)</sup>。いずれにしても、1672年制作のグレロの描画(図11)、1710年のロースの描画にはパントクラトールは描かれていないことから、その時点までには完全に覆い隠されたことは確かである。

人物像を含むモザイクは、スルタンが敬虔であってもなお、全てが覆い隠されたわけではなかった。宮廷イマームであったムスタファ・サーフィーは、17世紀初頭のアフメド1世のあつい信仰心を伝えている<sup>20)</sup>。1599年に英国エリザベス1世がアフメド1世の父親にあたるメフメド3



図13 アプス上部の聖母とキリスト  
(Mango fig.106)



図14 大天使ガブリエル  
(Mango fig.107)

世に贈ったオルガン兼西洋時計には、鳥やラッパを吹くカラクリ人形が付いていた。先代スルタンはそれをイスラームの教えに反しているとは認識しなかったが、アフメド1世は不適切と判断し、これを破壊したというのである。アフメド1世が宗教的な決まりごとにより敏感なスルタンであったことは間違いないが、このスルタンの治世（在位：1603-17）の後、1672年と1710年の礼拝室の様子を伝えるグレロ（図11）とロース（図12）の描画からは、アプシス上部にキリストを抱く聖母マリア像（図13）、その横に大天使ミハエルとガブリエル（図14）、ペンデンティヴには4つのセラピム、そして東側大アーチのイントラドスには人物像が露出している様子が見て取れる。高所にあり、当時は堂内が薄暗かった可能性はあるものの、イスラームの原則からすると不自然な光景である。礼拝室を見下ろすアプシスの半ドームにキリストを抱く聖母マリア像が残されていたことを、預言者ムハンマドがカーバ聖殿の偶像と絵は排除したものの、膝にキリストを抱くマリア像だけは残したエピソードと関連付けて考える研究者もいる<sup>21)</sup>。確かにアフメド1世は、当時オスマン帝国下にあっ

たメッカのカーバ聖殿の修理を行っていることから、カーバ聖殿の歴史的経緯を詳しく知っていた可能性がないとはいえない。そう考えると、ただ単に高所にあるからということだけでなく、意識的に残された可能性も考えられる。いずれにしても、どのモザイクを覆い隠し、どのモザイクをそのままの状態にしておくかは、その当時の宗教上の微妙な解釈に左右されていたはずである。そして最終的には、1750年までにはペンデンティヴのセラピムを除く全ての人物像モザイクに漆喰が塗られた。とはいえ、ロマヌス三世の碑文を含むモザイク画の一部が1801年にはまだ目撃されており、その漆喰の塗り方は部分的には薄いところもあったようだ<sup>22)</sup>。

19世紀半ばにはオスマン帝国下における2回目の本格的な大規模修理が行われる。それはセリム2世の命により1573年に行われた大修理後から約270年余りを経てのことで、1846年に出されたスルタンアブデュルメジドの命により1847-49年に行われた。前回の大修理と異なる点は、外国人建築家であるスイス人のフォッサーティ兄弟の手に修復作業が委ねられた点であるが、その委託の経緯についてははっきりしない。生前のフォッサーティ兄弟はモザイクの状況に関する報告書を刊行することはしなかったが、20世紀に入って、兄弟に関する31箱に及ぶ資料が文書館に収蔵、整理され、分析が行われた。加えて、フォッサーティ兄弟が修理に従事していた2年間のうち5ヶ月間にわたり、コンスタンティノーブルに滞在したロシア人建築家ザルツェンベルクが、その当時に漆喰が落とされていたモザイクについての記録を残している。それらを丹念に分析したマンガは、フォッサーティとザルツェンベルクの作業の中で存在が確認されたモザイクの半分以上が、1931年に調査許可を取得した米国ビザンティンインスティテュートによる調査においては、存在が確認されなかったことを指摘している<sup>23)</sup>。かなりのモザイクがこの間に消失したことになる。その理由のひとつとして、18世紀には既に慣習化していたと考えられ、アヤソフィアが博物館へと変更される1930年代まで続いたとみられ

ているヴァンダリズムの存在が指摘されている。アヤソフィアのモザイク片が、外国人の訪問者等に売却されていたのである。加えて、1894年7月10日の大地震で、構造体には被害は及ばなかったものの、モザイクやモザイクを覆うモルタル壁の一部にどの部分か特定は出来ないが、なんらかの被害があったと考えられる。この地震の後の修理の際に、西側アーチでは漆喰の塗り直しが行われ、その際に状態の悪いモザイク装飾が取り除かれたという記述があり、状態のよくないその他のモザイクについてもこの時に同時に取り除かれた可能性が考えられる<sup>24)</sup>。

以上のように、18世紀以降、ヴァンダリズムによるモザイクの消失は確かにあった。しかしその一方で、18世紀半ばまでの間、イスラーム社会の中でモザイク画が目に見えるかたちで存在していたことも確かである。アヤソフィアは、15世紀半ばのコンスタンティノーブル征服から、約300年の間、それぞれの時代の宗教的解釈を実践しながら、少しずつイスラーム化していったといえるだろう。

#### IV むすびにかえて

オスマン帝国にとってアヤソフィアはイスラームの勝利の象徴であるとともに、高度な建設技術と装飾美が凝縮された憧れのよりどころであった。オスマン時代の建築家達は、アヤソフィアの構造を研究し、半ドームを導入することによって、スルタン達のモスクにも高さや奥行のある大空間を実現してみせた。新設の大モスクが増え続ける中、ミナレットの増築によるアヤソフィアのステータスの強化は、この建築がスルタン達に新設されたモスクと同等であるべき存在だったことを示している。さらにはセリム2世が、帝国最大規模で宮廷主任建築家スイナンの傑作と位置づけられる自らのモスクではなく、アヤソフィアに永眠することを望んだこと、さらにその後続く複数のスルタンもそこを墓所と選んだことで、ア

ヤソフィアは王室の歴史と深く結びつくものとなった。スルタン達がそれほど身近に感じていたアヤソフィアにおいて、礼拝空間を見下ろす位置に、キリストを抱いた聖母マリア、大天使等、人物像を含むモザイク画が18世紀まで残されていたことは、その装飾美を黙認できるほどに宗教的な解釈がゆるやかな時期があったこと、そして異なる宗教文化が相互に接触し、交流しあった時間と空間が存在したことを表している。

ここで注目すべきは、これらの接触と交流があったと考えられる約300年という時間の長さである。オスマン建築はビザンティン建築から少なからずのことを学び、それらを自らの建築文化に根付かせた。ビザンティン文化は即時に否定されたわけではなく、あるときにはその技術力と美はイスラーム社会の中で吟味され、取捨選択され、新しい文化の創造を支える糧となった。またあるときには、モザイクのように決して短くとはいえない共生のときを経て、イスラームの社会の中で消えていくものもあった。アヤソフィアは、キリスト教とイスラームという宗教の枠組みを超えたつながりが実践された場所であったという点で、大変貴重な過去をもつといえるだろう。アヤソフィアの歴史を語る上で、この二つの要素のどちらも欠けてはならないのである。

## 注

- 1) Milli Gazetesi (2005). *İsviçre’de Ayasofya kilise olsun kampanyası*. 2005, 10, 21.  
<http://www.milligazete.com.tr/haber/9432> (2012年8月27日閲覧)
- 2) オスマン時代のイスタンブールは、Kostantiniyye という名称で呼ばれた。Necipoğlu, Gülru (2010). *From Byzantine Constantinople to Ottoman Kostantiniyye: Creation of a Cosmopolitan Capital and Visual Culture under Sultan Mehmed II*. In *Ex. cat. From Byzantium to Istanbul: 8000 Years of a Capital, June 5-Sept. 4, 2010, Sabancı University Sakıp Sabancı Museum, Istanbul*. Istanbul: Sakıp Sabancı Museum. p. 262.
- 3) İnalçık, H. and Murphoy, R. (1978). *The History of Mehmet the Conqueror by Tur-sun Beg*. Minneapolis : Bibliotheca Islamica. 51a-53a.
- 4) Öz, Tahsin (1938). *Fatih Mehmed II Vakfiyeleri*. Ankara.
- 5) İnalçık, H. and Murphoy, R., op. cit., 58a-58b.
- 6) Aslanapa, Oktay (1989). *Türk Sanatı*. Remzi Kitabevi; Kuban, Doğan (1958). *Osmanlı Dini Mimarisinde İç Mekan Teşekkülü: Rönesansla bir mukayese*. Güven Basım ve Yayınevi.
- 7) バットレスは建物の壁を外側から支える構造体で、控え壁ともいう。
- 8) アヤソフィアの構造については、日高健一郎・佐藤達生編 (2004) 『ハギア・ソフィア大聖堂学術調査報告書』中央公論美術出版。Mainstone, R. J., (1988). *Hagia Sophia*. Thames and Hudson.
- 9) Ağaoğlu, Mehmet (1930). The Fatih Mosque at Constantinople. *The Art Bulletin*, Vol. 12, No. 2, pp. 179-195. 拙稿 (1998) 「エスキ・ファーティヒ・モスクの復元図に関する研究」『芸術学研究』第2号 pp.93-102.
- 10) ミフラープとは、メッカの方向を示す壁がんのこと。
- 11) スィナンパシャモスク (1555年) とカラアフメトパシャモスク (1555年) の他にオスマン時代に建設された六角架構のモスクは、ソコルメフメトパシャモスク (1571年)、アティキヴァーリデモスク (1579年)、ジェッラフパシャモスク (1593年)、ヘキモウルアリパシャモスク (1734-35年) がある。
- 12) Kuran, Aptullah (1986). *Mimar Sinan*. Hürriyet Vakfı Yayınları. pp. 97-102.
- 13) Emerson, William and Van Nice, Robert L.(1950). Hagia Sophia and the First Minaret Erected after the Conquest of Constantinople. *American Journal of Archaeology*, Vol. 54, No. 1, pp. 28-40; Aşık Mehmed. *Menazrû'l-Avalim*. 3 vols. Edited by Ak, Mahmut (2007). Ankara: Türk Tarih Kurumu; Edmondo de Amicis (1878).



- Constantinople*. (trans. Tilton, Caroline). New York: G. P. Putnam's Sons. p. 173.
- 14) Necipoğlu, Gülru (1992). The Life of an Imperial Monument: Hagia Sophia after Byzantium. In Mark, Robert and Cakmak, Ahmet (eds). *Hagia Sophia: From the Age of Justinian to the Present*. London: Cambridge University Press. pp. 195-225.  
セリム 2 世は、メフメト 2 世期に建設された 2 本のミナレットのうち 1 本を再建している。
- 15) Başbakanlık Arşivi, İstanbul, Mühimme Defteri 21, no. 615, Mühimme Defteri 22, no.171; Refik, Ahmet (1935) *On Altıncı Asırda İstanbul Hayatı (1553-91)*. Ankara: Maarif Vekâleti. no.14, no.18; Emerson, and Van Nice, op. cit., pp. 28-40.
- 16) Samuelyan, H. G. (1890). *The Mosque of St. Sophia*. New York. p. 6.
- 17) Koçu, Reşad Ekrem (1960). *Osmanlı Devrinde Ayasofya*. İstanbul Ansiklopedisi. 3:1445-86.
- 18) Mango, Cyril A. (1962). *Materials for the study of the mosaics of St. Sophia at Istanbul*. pp. 117-140. コンスタンティノーブル征服以後のアヤソフィアの状態に関する旅行家達の記述は、マンゴが大変な苦勞の末に様々な言語の記述を著書の巻末にまとめている。
- 19) Mango, op. cit., pp. 122-6.
- 20) Mustafa bin İbrahim Safi. *Zübdetü' t-tevarih*. Ms. T. K. S. Revan 1304, fols. 39r-39v; Reyhanlı, Tülay (1983). *İngiliz Gezginlere göre 16. Yüzyılda İstanbul'da Hayat (1582-1599)*. pp. 52, 143-6.
- 21) Encyclopedia of Islam (1978). Leiden, 4:320; Necipoğlu (1992), op. cit., p. 218.
- 22) Mango, op. cit., pp. 130-132.
- 23) Ibid., p. 100.
- 24) Ibid., p. 80.

## 図版出典

- 図1 筆者撮影。
- 図2 Mainstone, R. J., (1988). *Hagia Sophia*. Thames and Hudson.
- 図3 Goodwin, Godfrey (1971). *A History of Ottoman Architecture*. Thames and Hudson.
- 図4 筆者撮影。
- 図5 Aġaoġlu, Mehmet (1930). The Fatih Mosque at Constantinople. *The Art Bulletin*, Vol. 12, No. 2, pp. 179-195.
- 図6 Aslanapa, Oktay (1989). *Türk Sanatı*. Remzi Kitabevi.
- 図7 筆者撮影。
- 図8 Aslanapa, Oktay (1989). *Türk Sanatı*. Remzi Kitabevi.
- 図9 Goodwin, Godfrey (1971). *A History of Ottoman Architecture*. Thames and Hudson.
- 図10 Mango, Cyril A. (1962). *Materials for the study of the mosaics of St. Sophia at Istanbul*.
- 図11 同上。
- 図12 同上。
- 図13 同上。
- 図14 同上。